

『落穂集』（南部家本）の翻刻と解題

——元祿期江戸雅文壇資料紹介——

松 野 陽 一

要 旨 近世初中期の江戸雅文壇の歌会資料については『文翰雜編』（山本通春撰。寛文三―元祿十を収録）が活字化されて知られているが、諸藩の江戸藩邸で記録されていた詩歌会資料を総合的に整理する必要があるかと思われる。

水戸藩『文苑雜纂』（慶安四―元祿十三・安永八）、仙台藩『公武詩歌聞書』（元祿十六―寛延）などの資料がそれで、本稿で紹介・翻刻する盛岡南部藩『落穂集』もそうした記録の中からの七ヶ度（元祿元―六）の詩歌会の抄出資料である。南部家江戸藩邸（桜田邸、八戸藩麻布邸）、知足院、金地院を「場」とした、將軍綱吉文化圏の 南部重信とその一族、毛利綱元、知足院隆光、金地院崇寛、林大学頭、また専門歌人の清水宗川、岡本道寿（宗好男）らの詠作活動の状況をうかがうこととしたい。

一 諸藩江戸藩邸の詩歌会記録

近世堂上派和歌については、このところようやく歟の入れられ始める気運にあるが、こと地域としての「江戸」の歌壇資料となるとまだ主要資料の紹介・翻刻が必要とされる研究段階にあるといわねばならない。そこでこの十余年来調査・収集してきた資料のうち、主要なものについて、歌会資料・撰集・家集・歌学書など、順次紹介してゆくこととしたい。本稿では、歌会資料から、南部家の江戸上屋敷であった桜田邸を中心として貞享・元禄年間に催された詩歌会の記録である『落穂集』（外題『貞享落穂集』）を取りあげることとした。

近世初期の江戸雅文壇の資料としては

『文翰雜編』書陵部本

『文苑雜纂』内閣本・彰考館本・狩野文庫本

『公武詩歌聞書』甲本 伊達文庫本

『公武詩歌聞書』乙本 伊達文庫本

などがあり、⁽¹⁾『落穂集』もこれら一群の資料の中に位置づけられるものと思われる。

『文翰雜編』正編二十冊、付録五冊は「京都大学国語国文資料叢書」八冊（昭和53・59臨川書店）に活字化されて広く知られるようになったが、日野龍夫氏の解説によると、編者は山本通春。正編は「寛文三年（一六六三）から元禄十年（一六九七）までの足かけ三十五年にわたって、編者山本通春が、みずから出席した歌会、詩会の作品はもとより、出席していない会の作品やさまざまな種類の詠草までも広く集め編纂したもの」という。解説の通りおおむね作品の成立年次順の編年体の配列だが、後に入手した古い詠草資料をその年次のところへ編入したりして部分的な乱れが生

じている。通春の父は松永貞徳・木下長嘯子の弟子であった山本春正。寛文四、五年の頃（後記する如く『文苑雜纂』に拠って承応までその時期を引き上げることができる）に水戸家から招かれて江戸に下り、清水宗川、岡本宗好らと共に江戸歌壇で活躍し、『正木のかつら』の撰にかかわって天和二年（一六八二）に没している。通春は恐らく父の縁で寛文八年（一六六八）頃に江戸に下り、貞享三年（一六八六）頃まで滞在し、その後は京都に戻って元祿十五年（一七〇二）に没したことが日野氏によって考証されている。従って、『文翰雜編』は、寛文・貞享期の江戸歌壇とその後元祿十年までの京都歌壇を主とした、山本通春の個人の眼を通したものを中心にした記録ということになる。資料性の高さは日野氏の解題の説く所である。これに対して『文苑雜纂』『公武詩歌聞書』は、それぞれ水戸徳川藩、仙台伊達藩の、いわば公的な公武の詩歌会の記録である。

『文苑雜纂』は、彰考館本六十六冊が原本。同館目録に「彰考館員撰」とあるが、同本には序・奥書の類は一切なく、目録編纂者による認定であろう。内容は公武の詩文・和歌・連歌・連句・記・論等を編年順に記録したもので、慶安辛卯（四年）から安永八年に及ぶ。もともと、第三十五冊（貞享四年丁卯）までが厳密に編年体で一年一冊の原則がうかがえる（途中若干の年次順の異同はある）が、元祿に入るとやゝ内容に混乱が見られ、それでも第五十九冊（元祿十三年庚辰）までは何とか年次順が守られるのに対し、第六十冊は「菊詩編序」で一冊を占め、第六十一冊と六十五冊は宝永・安永の作が飛び／＼に記されるといった状態なので、『目録』に「元祿年代」とあるように、礎稿は元祿末年頃の編纂なのであろう。なお、最終巻第六十六冊は、巻五と十九（明暦二と寛文十二）の巻別作者目録である。宝永以降の作は編纂作業の一応の終了後の補足部分と推定される。

内閣文庫本二十冊は右原本から詩文を除き和歌・和文のみを抄出した抜書本であるが、巻一と十二が慶安四と元祿十一年の江戸藩邸（仙洞公家衆のものも含む）の分、巻十三と二十が元祿二と同十三年の国元常陽の分という構成で

あることから、原本が元祿十三年頃まででまとまっていたことを推測させよう。なお、東北大学狩野文庫本二冊も和歌和文のみの抄出本。慶安から延宝四年までのものだが、巻末にやゝ不自然さがあり、残欠本と考えておく。

『文苑雜纂』はこのように水戸藩による初期雅文壇の（十七世紀後半五十年間の）記録であるが、その水戸家に関係の深い『文翰雜編』と重ならない作品が多いことが注目される。光圀に招かれた山本春正、清水宗川、岡本宗好らの江戸歌壇参入の時期が承応頃まで遡ることがこの『文苑雜纂』によって知られ、小高敏郎氏『近世初期文壇の研究』の所説を補訂することができる。

一方、『公武詩歌聞書』は、宮城県図書館伊達文庫蔵の孤本で、現状は同名二本（九一一・二六八の三冊写本八仮に甲本と名付るV。九一一・二六四の三冊写本八同じく乙本V）の形態で登録されているが、本来は全体で一本であったものと推測される。即ち

甲本―元祿・宝永・正徳・享保

乙本―享保・元文・寛保・延享・寛延

といった歌群構成で、両本に重複歌はないところから、本来は一連の編年歌群資料をまとめてあったものと考えられるからである。ただし、配列は年次順という点では厳密でなく、特に甲本部分での前後の乱れ甚しく、まゝ寛永年時等の古詠の混入も認められる。大半が伊達五代藩主吉村の治世期（元祿十六～宝暦元）の作であり、吉村近辺で集成した詩歌稿の仮整理段階（詞書の表記など、編纂者の視点からの統一した記述でなく、個別の資料毎に異なっている）で、歌稿の表記がそのまま反映している仮整理の段階にあると考える）の記録であろう。伊達家の江戸藩邸での詩歌会を中心に、若干国元仙台での作を含み、公家の詩歌会の記録にもかなり紙幅を割いている。伊達藩関係者が直接かわからない歌会資料など入手して収録している点に、「聞書」と題される所以があろう。

『文苑雜纂』に比すと、同書収録詩歌の詠作年時の下限にはば接統し、その後の（十八世紀前半の）約五十年間の作を収載しており、堂上派和歌の江戸歌壇での定着の時期に当たっていることが注意される。関西圏で修学後、東下する者の多かった時期の後をうけて、当初から江戸で育って指導者となった麻布長幸寺僧亭弁の作がかなり多く入集している（拙著『江戸堂上派 習古庵亭辨著作集』未所収）点など、江戸武家歌壇の解明に役立つ所の大きい資料である。

本稿で紹介する『貞享落穂集』も右に叙べてきた諸藩江戸藩邸での記録同様、盛岡南部藩邸の記録からの、貞享五（元禄元）と元禄五の七ヶ度の抄出資料集である。後記する如く清水宗川の活動などに問題点の見出される資料である。

二 『貞享落穂集』の書誌

『貞享落穂集』は盛岡市中央公民館蔵の袋綴一冊本で、表紙は縦二七・九cm、横一八・六cm、枯葉色漉き目の紙表紙。左肩の銀箔を散らした題簽に、「貞享落穂集」と外題する。内題は扉中央に「落穂集 源鳳扇」とあり、編者源鳳扇（南部利謹）の命名と推定される。本文料紙は猪紙で、墨付三十五丁、後に遊紙一丁。二丁分の序は八行書き、本文は一面十一行書き。詩（全て七言絶句）は句毎の分ち書きをせず二行に書き、歌は一行、題は詩歌共に二字分下り。作者名は題の行に下記。南部家一族と林大学頭、金地院崇寛と知足院隆光の二僧は家臣らより二字上りで記している。詩は楷書体、歌は行書体で精写（版行のための版下の如き印象）されている。

奥書はなく、序の記された安永乙未二月丁酉が、序の筆者南部利謹の自筆と（花押から）認定できることから、この本の書写年時と推定される。乙未は安永四年（一七七五）である。利謹（としのり）は南部家十代藩主利雄（としかつ）の嫡男。『寛政重修諸家譜』によると、延享三年（一七四六）の生れ。十六歳の宝暦十一年（一七六二）従五位下信濃守に叙任され、藩主を継ぐ準備に入っていたと思われるが、病によって安永三年十一月十八日嫡を辞し、叔父に当る利

正が後嗣となっている。つまり、本書『貞享落穂集』は廃嫡直後の春に序が記され、成立しているということになる。序冒頭の「思はずも深山のおくのすまゐりして、くもゐる月をよに見んはかたじけなくも叶えさせ給ふ」はその間の事情を臚化した表現で物語っていることが知られる。政務から離れ、「和歌の家」と利謹が輶晦表現で記す南部家伝来の記録から、「あやしの宮のそこより此集をなんひろひ、(中略)友どちの力を得て、つゐに集をなす」ということになったのだという。家臣の手によって本文の清書をせしめ、自ら序を付したのであらう。

印記は序の末尾(第二ノ裏)、利謹の花押に重ねて①「鳳扇」の朱二行方印(二・八cm×二・六cm)、扉紙表中央下部に②「柳岳」の朱陰刻一行長方印(三・三cm×一・五cm、その下に③「膝邦弼印」朱陰刻二行方印(三・六cm×三・七cm)、扉裏右上部に④「南部家／圖書」朱二行方印(三・六cm×三・六cm)の四種がある。①は成稿直後のもの、②③は装訂後、保管の段階に入っているもの、④は明治期の南部家本整理の段階のものと推定される。

表紙右下隈にラヴェル「文学、詩文、歌集」「935・1」が貼付されているが、これは南部家関係書の仮目録の分類番号である。

本書には貼紙が非常に多い。第21丁オに貼られたものを除くと全て袋綴の内側に貼られており、それらは全て本文に一旦書写された字を削って紙粉で埋め、訂正して重ね字をした箇所や、本文解釈上疑義のある箇所に対応している。即ち、清書本文の校訂に関しての貼紙なのである。和歌の場合はかなづかいの異同が主で、「うつろはぬ」(10丁ウ行信歌)の如く訂正箇所の右傍に朱〇印を記す。また、「山の端にはのゝ字不入敷」(16丁オ貞短歌)の如く慣用表記からの用字の選定などであるが、貼紙には訂正前の本文を示さず、訂正後の用字箇所を示したり、未訂正のまま疑義を記すにとどまり、結果として貼紙本文と本文とは同文になっているので、後掲の翻刻本文ではその箇所を特に指摘する処置をとらなかった。これらの作業は、(1)貞享五年桜田館詩歌会の作者表記の末尾に記されている、△詩▽の小

田持朝・杉田正懿、△歌▽の到岸・阿部立順の四人の「校合」によるものと推定してよからう。即ち、この四人は(1)の会に出席したのではなく、(1)～(7)の全体を校合した、安永三年末～四年初頭の作業に関連して表記されたものと、未勘のまゝ一応、推定しておく。

三 内 容

本書に収録された詩歌会は次の七種である。

(1)貞享五年六月十九日、桜田館

題 蟬声暮送、水辺納涼、松有歓声、夏菊

(2)元祿二年九日晦日（桜田館）当座

題 菊久盛、庭紅葉、寄鶴祝

(3)元祿二年十月五日 知足院 通題・当座

題 時雨、落葉、冬祝

(4)元祿二年十月二十七日 金地院冲西堂

題 竹契遐年 以下歌人毎に二種異題（例、隆光 雪中残雁、樵路日暮）

(5)元祿二年十二月十三日 麻布邸

題 寄世祝、以下歌人詩人毎に異題（例、行信 寒月、以和 海辺雪……）

(6)元祿三年六月二日 桜田館

題 雨後夏月 以下歌人詩人毎に異題（例 林学士 連峯霞、貞矩 余寒月）

(7)元祿五年十二月二十二日 桜田館

兼題 松雪、竹雪、歳暮、通題 寄国祝と各人毎異なる恋題(例 待恋、祈恋、逢恋、近恋……)

即ち、(1)(2)(6)(7)は盛岡南部家の江戸上屋敷の桜田邸、(5)は八戸南部家の麻布市兵衛町の上屋敷、(3)の知足院はもと湯島にあって將軍綱吉の尊信をうけた隆光が住持したが、元祿八年神田門外に移して護持院と改めた。南部直政が將軍綱吉側近(元祿元年補側衆)であつた縁で隆光住持の知足院での詩歌会が催されているのであろう。金地院は、家康に重用された崇伝が天和四年開いた芝の臨濟宗の寺でその門流の崇寛と南部家の交友關係で選ばれたものと推測される。なお、詩の冲西堂元令、元云も金地院僧である。南部家では藩主の場合は盛岡に葬られるが、その近親者の場合、重信男(行信弟)の政信・勝信とその後裔、行信男の実信、八戸南部家二代直政は金地院を葬地としている。江戸における菩提寺であつた。

歌題の面から見ると(6)を除く全てに「祝賀」題が含まれており、(6)も「雨後夏月」の共通題の他は四季・雑の組題(二十九題しか現存しないが、清水宗川の一首が欠けており、本来は三十題三十首の構成であつたものと推測される)となつており、全体にあらたまつた性質の詩歌であるので、南部家關係の詩歌会のうちから、晴儀性の濃い会を抄出して一書としたものであろう。歌題に関しては、後掲の出詠表によつて知られるように、次の諸点が問題となるが、その原因を推察しておく。(1)では「夏菊」だけが結題でなく、安節・通信の作が欠けているのは、恐らく結題三題の兼題の会で、「夏菊」は当座題だつたもの。二首の欠脱は当日欠席したか、清書者の誤脱か不明。(2)では安節・以和の作の欠脱は、政包の作者名誤脱と同じ理由か。(4)の白水の「竹契遐年」の共通題のみ出詠で他の二題の作の見えぬのは、(1)同様に兼題だけ詠んで当座に出席しなかつた可能性がある。(6)の安節と宗川の作の欠脱は先述した組題の可能性から清書者の誤脱かとも思われる。(7)で実信の「朽雪」「竹雪」「歳暮」の兼題が欠け、宗川が各二首ずつ詠

『落穂集』(南部家本)の翻刻と解題(松野)

(7) 桜田屋敷 元禄5・12・22	(6) 桜田屋敷 元禄3・6・2	(5) 麻布屋敷 元禄2・12・13	(4) 金地院冲西堂 元禄2・10・27	(3) 知足院 元禄2・10・5	(2) 桜田屋敷 元禄2・9・晦	(1) 桜田屋敷 貞享5・6・19	詩歌会
松竹歳寄 二種異人題 雨後夏月	寄世歌人每異題	寄世歌人每異題	二種契遇年	冬落時	菊庭久紅盛	水声涼暮	題
	○○○ ○○○ ○○○	○○ ○○	○○○ ○○○ ○○○	歌 △○○ ○○○	○○○ ○○○ ○○○	○○○ ○○○ ○○○	<詩人> 南部直政(浩然) 林大学(弘文院) 金地院崇寛(聴雪) 冲西堂元令(元冲) 积元云 下村奚疑 根城安節
○○○○○ ○○○○○ ○○×××	○○○ ○○○ ○○○	○○ ○○ ○○	○○○ ○○○ ○○○	○○○ ○○○ ○○○	○○○ ○○○ ×○○	○○○ ○○○ ×○○○	<歌人> 南部重信 〃行信 〃通信 〃実信 毛利綱元 知足院隆光 清水宗川 村田長庵(以和) 三浦可春 中野正仲 惟子政包 日戸貞矩 白水道定 山田長堅 岡本道寿 植山檢校梅枝

『落穂集』出詠表

○ 出詠。◎ 同題で二首。× 会に出席しながら作品を欠く。△ 詩人で歌を出しているもの。
□ 作者名欠。

出しているのは、この会張行の四日前に実信が従五位下準人正に叙任していること、宗川の「歳暮」題が題の本意からは異例な

諸人も猶あふくらしこの殿の千世の初の年のくれとて

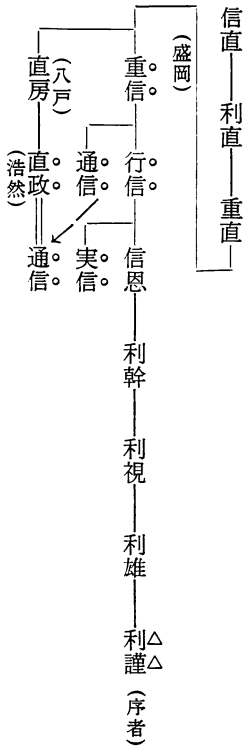
末遠き千年もさぞな暮毎のけふの祝やためしなるらむ

の如き祝禱性を備えた歌であることなどから、実信の叙任祝賀の会であった故に、実信は詠まず、一座の長老歌人の宗川が歌数を揃えた（実信の代作の意を含むか）ものかと解される。

この全体の祝賀性の強い傾向は、抄出主体の南部利謹の廃嫡直後の暗い現実と深い（裏返し）関係を有っているものと推測される。

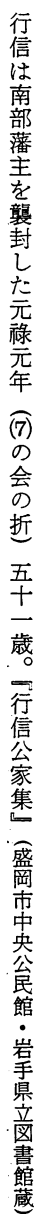
次に人的構成の面から見ておきたい。本書の性質上、南部家の人々が多い。

（南部家系図） ○印出詠者



なお、(6)に出詠している毛利綱元（長府藩第三代藩主）は貞享元祿期の大名歌人として名があるが、南部家との姻戚関係にあるので併せ記しておく。

即ち、(6)では姻戚関係による客人として出詠しているものと思われる。この元禄初年当時、江戸歌壇で活動していた武家歌人では田村宗永（一閑藩主）や堀田一輝らが知られ、延宝二年（一六七四）水戸家の関係で清水宗川・岡本宗好・山本春正らが撰じた『正本のかづら』にはその作が見られるが、南部重信は九首、毛利綱元も二首入集している。重信は中院通茂門。元禄五年（二七九二）六月二十七日七十七歳で致仕、嫡男行信に家督を譲っている。(7)はその直後の年末の会ということになる。三種の家集があるが、そのうち部立のある『重信公家集』（慶応本・盛岡市中央公民館本）にこの『落穂集』の重信歌は朱注を含めると全て入集している。毛利綱元の文芸事跡については渡辺憲司氏の『毛利綱元文芸関係略譜』（日本文学研究22、昭61・11）に詳しいが、日野弘資門で、前記田村宗永と親しく、宗永・綱元が六百番歌合判詞について弘資に質問し、弘資が答える形で成立していった『日野弘資卿和歌之答』（二建弘答）など多くの書名がある）が知られている。(6)に出詠した事情は前述の如く推測したが、元禄三年四十一歳である。



一冊がある。八戸藩主の直政は將軍綱吉の側用人となった元祿元年(1)の冬が二十八歳。通信は襲封は元祿十二年なので(1)に出詠した同元年はまだ本家に居り、十六歳の時であった。なお、実信が(7)に出詠したのも十七歳、前記の如く叙任の祝いの折であったかと思われる。

大名家以外の人物で作者表記上同列に扱われて敬意を表されているのは、林信篤(弘文学院学士、後大学頭)、金地院崇寛(聰雪)、知足院隆光の三人である。

いずれも將軍綱吉の側近で、その寵を背景に、専門分野ばかりでなく、政治・文事に幅広く活躍したのは周知のところである。林信篤は、將軍侍講としての功で貞享四年二月四十四歳の折に弘文学院学士の号を賜り、法印に叙されている。(1)はその翌年の会ということになり、作者表記も正確に記されているわけである。また、元祿四年正月四十八歳の時、昌平坂の聖堂造宮の成功で、従五位下に叙し大学頭を称することとなった(諸家譜)。(2)(3)(4)(6)の出詠は丁度その間のことであり、信篤の最も充実した時期の作であるといえることができる。金地院崇寛については同院冲西堂福源元令・元云とともに調査が行きとどいていないので省略する⁽²⁾。なお金地院は城内では知足院と大略同格で対、もしくは護国寺と三ヶ寺で勤務していた(隆光僧正日記)故実帳。

知足院隆光は將軍綱吉の護持僧として著名な人物であるが、正保元年(一六四四)の生れ、幼時唐招提寺に入り、次いで豊山長谷寺に登り、亮汰に師事、貞享元年(二六八四)同寺内六坊の一つ慈心院住持となった。同三年、將軍家からの命で筑波山知足院住持となり、江戸の知足院別院に入って、同年権僧正に任ぜられた。元祿八年(一六九五)、知足院を護持院の称号に改め、独立の院室とし、大僧正に昇叙して一派の僧録職とした(隆光僧正日記)。(1)~(6)に出詠したのは四十五~七歳、知足院住職権僧正の時に当る。『隆光僧正日記』を見ると、將軍綱吉の元祿期における観能、詩歌会、連歌会など文事⁽⁴⁾への関心の旺盛さを知ることができるが、隆光はその定連で、城内や白山御殿の会に詩歌を

詠出している。大名との交遊でも、毛利綱元・細川綱利・牧野成元らとの詩歌の贈答をしている。⁽⁵⁾ 南部家の会（ここでは和歌のみだが）もそれに並ぶ事跡なのであった。

詩人の下村奚疑は、『文藻諸芸人名録』（盛岡市中央公民館蔵。南部藩の詩・歌・俳人、学者の人名録。明治初年成。写四冊）によると、元京極高国の家臣。丹後宮津城主京極高国は寛文六年（一六六六）その父高広による不幸無道の愁訴により所領没収、南部重信に預けられ、盛岡流謫の身となった『寛政重修諸家譜』が、その折に同道。延宝三年（一六七五）高国没後、南部家の臣となった。元禄四年十月十六日没。名は由章。号暗室、宜平、活水。作品に高国流謫の際の江戸へ盛岡の旅行記『盛岡紀行』写一冊（盛岡中央公民館本）、『南部記録註解抄』写一冊（伊東祐清補。元文四戊。岩手県立図書館蔵）がある。南部家に仕えてからは江戸詰となったのであろう。墓所長松院。

根城安節は姓から推して八戸南部家々臣と思われるが不詳。下村奚疑（『盛岡紀行』中に若干の詩が見える）ともども他の詩業についての資料を見出し得ていない。

歌人では、清水宗川、村田長庵（以和）、三浦可春、中野正仲らの定連と、岡本道寿、植山検校梅枝（之）が、他での歌壇活動も知られている人々である。清水宗川は慶長十九年の生れ、元禄十年（一六九七）十月二十日没。八十四歳。飛鳥井雅章、松永貞徳、木下長嘯子に学び、承応頃江戸に下って水戸家に仕え、山本春正、岡本宗好らと江戸歌壇の指導的地位にあって活躍した。春正との『正木のかつら』の撰がある。この南部家歌壇でも長老格として遇されたのであろう。(1)~(7)の全てに出詠している。村田長庵以和は『正木のかつら』に七首、跡部良隆撰の『近代和歌一人一首』と植山梅之撰『歌林尾花末』（元禄十六年刊）に二首入集。三浦可春は、『文藻諸芸人名録』の「国学歌春」の項に、

三浦圓治、高貞、宝永二年二月君命にて江戸に於て見坊勇と共に歌書を撰す、同四年成りて之れを奉す、重信公大

に之れを重んじたり

とある人物と同一人と見られる。『歌林尾花末』に九首、坂静山撰『和歌継塵集』（宝永七年刊）に三首、同静山撰『和歌山下水』（享保十七年刊）に一首入集。京都歌壇と江戸歌壇を往復して活動していた渡辺友益（梅香庵春之。地下六人之内）とその門弟中野等和（杉目庵咏之）と可春は親しく（継塵集・山下水）、元祿・宝永期にかなり幅広い活動範囲をもっていた、南部家家臣の江戸歌人であつた。中野新左衛門正仲は(1)と(7)皆出席の定連であるが、他の事跡不詳。あるいは、延宝七年四月十日京都東山で催された山本春正七十賀会に出詠している中野太左衛門正幸との縁故があらうか。後考を待つ。岡本道寿は、刈谷本『一人一首』に「宗好男」の注記をもつ。『歌林尾花末』に三首、『新歌さざれ石』『和歌山下水』に各一首入集。父宗好の没年が延宝九年（二六八二）、その跡をついで清水宗川の周辺で活動の場を持ったのであらう。南部家との縁では、南部重信の三種の家集の中の一集『南部重信家集』（八戸市立図書館本八南一五—四五四V。盛岡市中央公民館本の書名は『詠百首和歌』。両本の内容は歌の出入りにやゝ異同がある）を撰進している。その識語に

右和歌者源重信朝臣之芳詠也。多年於^{亡父岡本宗好宅}人々因于成於月次之会有。拾此玉葉分四季作一帖畢。為酬彼朝臣之深恩、今又書写而奉納御廟所聖寿寺者也

元祿十五年^{壬午}八月廿九日 岡本道寿拜

とあり、重信の恩顧を蒙っていたことが知られる。重信は元祿十五年六月十八日に没しており、その直後の識語であり、追善の意をこめた撰集であることが知られる。

植山検校梅枝（江民軒梅之）は『歌林尾花末』（元祿十二—十五撰歌、十六年刊）の撰者として知られ、同集には南部家一族、家臣の入集歌が多い（重信二十九首、行信二首、通信一首八(1)の「蟬声送暮」が入るV、勝信一首、重信家・

行信家女子五人など)のも関係の深さを物語っていよう。同集には道定も「藤枝宮内南部住」と注記して六首入集している。他の惟子政包、日戸貞矩、山田長堅も未確認ながら、南部家々臣の可能性が高い。白水は金地院関係者であらうか。

この他、(1)にはハ詩Vの方に、小田持朝(江都家主、杉田正懿(同)、ハ歌Vの方に、到岸(東叡山僧)、阿部立順(盛岡医員)の名が「校合」として上っている。前述した如く、『落穂集』には「貼紙」が多く袋綴各紙の内側に糊付されている。漢詩は多くの場合表現典拠からの用字の考証。和歌は仮字づかいの訂正等である。清書本の校正点検と思われるが、これらの作業に関わったのがこの四人(恐らく(1)のみでなく(7)までの全て)であると思われるが、履歴の詳細を知り得ない。(1)の貞享五年の時点の作業ではなく、『落穂集』のまとめられた、安永三年末〜四年初頭の作業で、その頃の人物と想定しておく。

以上、人的構成は、南部藩主家の人々と姻戚の毛利綱元の、大名クラスのグループ。林大学頭と金地院の諸僧、知足院隆光ら、別格扱いの客人グループ、清水宗川、植山梅之、岡本道寿ら、歌壇の指導者格の専門歌人グループ、下村奚疑、三浦可春らの実力者を含めての、南部家々臣の詩歌人グループといった色分けができるかと思われるが、最後のグループを除くと、網吉時代の他大名家における詩歌会にも出詠する常連の顔振れであり、狭い南部家内の私的な催しにとどまらぬ性格を示しているといつてよい。元禄期江戸雅文壇の会の典型をここに見ることができるのである。和歌史的関心からは、専門歌人の宗川、道寿、梅之らの活動、特に定連として活躍している宗川の作品群が注目されよう。また、南部重信・毛利綱元・隆光僧正ら將軍綱吉周辺の文事に携わった人々の具体的な詠作活動、従来ほとんど知られていない下村奚疑・三浦可春・村田以和らの作品世界も吟味の対象にされて行くこととなるう。

この抄出された元祿初年の七種の詩歌会は、前記の如く南部家関係の晴儀の雅会という性格で一貫している。編者南部利謹の序にいう「和歌の家」としての南部家一族の最盛期の、綱吉の「聖代」讚美の意をこめての詠作活動の盛られた器が、本書なのであった。正嫡の身でありながら、病弱のためその当主の地位を放棄しなければならなかった青年の見果てぬ夢がこうした書を編ましめたと推察されるが、その意図とは別に、元祿期の関東雅文壇の典型的な催しの記録が、ほぼ正確な姿のままに後代に残されることとなったのは幸いなことであった。

翻刻に当って、序は読解の便宜のために句読点、濁点を付したが、詩歌会本文は前述の如く清書されているので、字配り、漢字の用字をそのまゝとし、和歌の変体仮名のみ平仮名として濁点は付さなかった。便宜のため、各詩歌会に(1)～(7)のタイトル番号、詩歌に会毎の一連番号を付した。

翻刻を許可された盛岡市中央公民館とその関係者の方々に謝意を表する。なお、本稿は平成元年度科学研究助成費(一般研究C)による研究の一部である。

注

- (1) 柳沢吉保家の『兼当和歌集』ハ元祿十三ゝ宝永二ゝ(内閣文庫本)などもこれに準ずる性格を持つが、北村季吟らを除いて、出詠者の大半が柳沢家内に限られるので一応省いておく。
- (2) 後に剛室崇寛は元祿十年三月十九日に二百八十一代の、雲叟元云は正徳元年九月十一日に二百八十五代の南禅寺住持となっている。
- (3) 隆光僧正日記元祿十六年二月十一日条に「今年六十」とあるのに従う。同日記「故実帳」とは矛盾する。
- (4) 観能―元祿六年十月二十二日、七年十一月二十五日、八年正月九日、連歌会―九年正月十九日など。
- (5) 元祿五年十一月十五日、八年三月二十四日、九年正月十二日など。
- (6) 以下私撰集は、上野洋三氏編『近世和歌撰集集成1』に拠る。
- (7) 小高敏郎氏『近世初期文壇の研究』参照。

貞享落穂集（外題）

落穂集 源鳳扇（扉裏）

落穂集自序

思はずも深山のおくのすまゐ^(c)して、くもゐの月をよそに見んはかたじけなくも叶^(c)えさせ給ふ。盛者必衰況世のならひ、たれかこのことはりにもれ侍らん。やつがれ和かの家に生れ、小倉山に心をよせ、須磨・あかしのくちずさみはあき人のよききぬきたるがごとし。しかはあれども身にすぎたのしむこゝろは、はまのまさごにして、こゝのすみ、かしこのはちより、和かの道にたよりあらん集をひろい出^(c)しけるに、哥仙の感応やましきけん、あやしの宮のそこより此集をなんひろいける。筆ぶり文字もさだかにわきまへねば、友どちのちからを得て、つゝに集^(c)をなす。亦よこばしからずや。すでに只家として一片の揆なきこと又はぢざらめや。いま此集を家に蔵すことたれか落穂ひろといわ^(は)ざらめかも。

安永乙未年二月丁酉

南部三郎源朝臣利謹々叙

扇鳳

（朱印）花押

(1)貞享戊辰林鐘仲九各聚桜田館有詩歌宴

詩輩

弘文院学士林麴後林大學

前龍山金地院崇寬別名聽雪

從五位下遠江守直政

西堂 福源元令

釋元云雲夏

村奚疑

根城安節

小田持朝

杉田正懿校舎

江都
家士

歌人

中大夫源重信

權僧正知足院隆光後護持院

從五位下信濃守行信

南部右近源通信

釋志水宗川

村田長菴以和

三浦可春

中野新左衛門正仲

東叡山僧

到岸

校合

盛岡城醫員

阿部立順

蟬聲送暮

弘文院學士

1 群動収聲斜日天南薰度曲答吟蟬前林說露猶客約惹得晚涼入夜絃

前龍山崇寛

2 嘈嘈亂蟬炎日長槐柯棗葉汝封疆夕陽送盡豈無意緩爲露滄徠夜涼

從五位下源直政

3 備聽吟蟬樹上悲使知齊女昔憂遺聲聲泣露思難絶送盡殘陽欲去遲

福元令

4 送夕蟬姑聊自娛葉間白露抱水壺悲鳴應是苦炎熱日影墮時聲亦墮

釋元云

5 雨後林巒風景幽綠槐高處晚蟬稠葉間繁響聽無盡斷送夕陽聲未休

村奚疑

6 形微翼短氣還長槐綠萋萋任行藏懷舊無疆齊女意談風說露送斜陽

根安節

7 潢耳蟬聲天欲曛涼風一曲答南薰
細蚪落夕陽影飛入綠槐高處雲

蟬聲送暮

從四位下源重信

8 陰たかき梢の蟬の声をへてくれてもかよふ杜の下風

權僧正隆光

9 柴の戸を誰かはとはん空蟬の声をよすかにけふもくらしつ

從五位下源行信

10 山川や木陰暮行瀧つ瀬にきこそわかね蟬の声く

源通信

11 陰たかき杜の梢にひまもなくくるををしむ蟬の声く

釋宗川

12 けふも又己か羽衣をりはへて日くらしに鳴蟬の声く

長菴以和

13 しけりあふ檐の廣葉の木かくれに夕暮ちかき蟬の聲く

可春

14 暑き日も漸くれそめて露のほる梢にきはふ蟬の声々

正仲

15 うつる日も茂る木陰は夏山のくるをいそく蟬の声く

水邊納涼

林學士

16 閑向寒流漱晚汀煩歎頓散覺惺惺人間潯暑醉如酒水國風清我獨醒

釋崇寛

17 夏日納涼心若秋避炎只作水邊遊不須濕許詩千首一路溪山一掬流

源直政

18 何待秋涼入座邊清流避暑枕晴漣炎塵不到境佳處使覺人間別有天

令西堂

19 池上相攸好納涼欲斟清冷洗中腸風漪巧織水紋簾潯暑自除磐石床

云叟

20 水邊忘暑暫綸伴爽氣滿襟吟意長底事浮生苦炎熱人間此處即清涼

村奚疑

21 既過花柳傍前川水引南薰疊冷漣宋相凌歎何必見清涼飽納淺流邊

根安節

22 一道清波水脉亭風荷香動暗通聲涼成徹骨忘煩熱間起枕流孫子荊

水邊納涼

源重信

23 たつねはやし水なかるゝ水上に夏なき里のもしも有やと

隆光

24 暑さをもいさしら波の立よする此きし陰の夕暮のそら

源行信

25 楸おふる清きなかれに立よれば夏をわするゝ山の下水

源通信

26 落瀧つ瀧のしら糸むすふ手に暑さわするゝ山川の水

宗川

27 絶す行音に涼しき夏とたにいはてしのふの山の下水

以和

28 瀬をはやみなかるゝ水の音たてゝあたり涼しくよする川波

可春

29 せきいれし流もあかすいかはかり涼しかるらん水の水

正仲

30 道の邊に岩もる水の涼しきを見て行過る人はあらしな

松有歡聲

林學士

31 滴林壽色祝天生虬角龍髻枝葉榮誇說韓娥歌一曲清風十里報歡聲

崇寛

32 風吹庭上響松時聽好歡聲來不期入秦南薰長解愠虞韶一曲萬年枝

源直政

33 鬱鬱蒼宮今古貞喬姿不改萬春榮風中自有歡色在一曲瑤琴日夜清

令西堂

34 非竹非絲更和難風松高調萬年歡知音唯有蓬萊鶴古曲共倡聲不乾

云叟

35 虬枝龍幹轉縱橫時聽靜靜清韶生風本無心松亦爾偶然只作合歡聲

村奚疑

36 素髓蒼髯四廊榮風箏琴琴和人清幸看雙鶴舞枝上松樹重歡萬歲聲

根安節

37 喬松落勢盤紆庭院日長新葉敷萬歲聲高風渡曲清陰獻壽認嵩呼

松有歡聲

源重信

38 この時と治りなひく国民のたのしむ声や千世の松風

釋隆光

39 君か代や千世もへぬらん松かえのそよめく風の声はしるしも

源行信

40 世と共にかはらぬ色のまつかえに千とせをつくる風の音かな

源通信

41 末遠くならさぬ風の色に出て松のみとりや千世をへぬらん

宗川

42 幾千とせ栄る宿にならすらん治る御代のまつ風の声

以和

43 ことの葉のつきぬ緑をあり数に万代よはふ松の下かせ

可春

44 ふりはへてとふ言の葉も散うせぬ松にやきかん万代の声

正仲

45 うこきなき岩根の松に吹風も御代は千年と声よはふ也

夏菊

林學士

46 枝枝涼氣暑塵空金蘂先秋日露叢清節高花隱逸喚成商嶺夏黃公

崇寛

47 籬菊夏開涼意新吹香含露絶炎塵愛花幸得北牕樂却勝羲皇上世人

直政

48 偏愛黃花朵朵幽炎天時節好風流南薰香起東籬下探請陶家三徑秋

西堂

49 金蘂先秋秀色鮮夏陰故愛竹籬邊炎天宜抄菊花水南部南陽易地然

雲叟

50 一枝黃菊發炎天又引薰風色尚鮮我亦淵明高臥意清香入夢北窓前

村奚疑

51 夏籬黃蘂奪秋光雖未傲霜堪暑陽料識北窓高臥意涼風送處菊花芳

源重信

52 霜にさへしほまぬ色の猶更に夏のまかきの菊の朝露

隆光

53 秋きぬとおとろかぬやは白菊の花の笹の夏の夕露

行信

54 白菊の咲る笹は夏のおきまとはせる霜かとそ見る

宗川

55 夏草の笹かもとに心とく誰うへ置て咲るしら菊

以和

56 あかす見ん夏の笹に色はへてさゆりに交るしら菊の花

可春

57 夏草の中にまかはぬ色香かな秋より先のしら菊の花

正仲

58 村雨の露も涼しき夏草の中に花さく庭のしらきく

(2) 元祿二巳巳九月晦日會

秋日詠三首和歌當座

菊久盛

源行信

1 うつろはぬ花のさかりは幾秋も齡久しき庭の白菊

知足院僧正

2 色々の花におくれて咲つゝく菊のにはひはむへも久しき

志水宗川

3 幾千世の秋のさかりをこのころの笹の菊に見るもかしこし

村田長菴

4 月影の残と見しはしらきくの盛り久しき明かたの色

惟子政包

5 花さかりいつまでか見んおく霜に猶しら菊の匂ふ明ほの

中野正仲

6 夜ころへて霜はおけとも色ことに盛久しき白菊の花

日戸貞矩

7 露霜に色もかはらて秋ことに盛久しき宿のしらきく

菊久盛
遠江守直政

8 三徑秋深霜後鮮菊花修約一籬邊田園歸去樂天處佳色爲吾伴永年

弘文院林學士

9 何問尋常衆卉菱東籬長見傲霜枝秋客引歲重陽後晚節風高香未衰

下村奚疑

10 隠逸還成富貴生金錢白玉九秋盈清香獨秀百花後籬落傲霜表人榮

金地院冲西堂

11 令來節去邊籬邊朶朶傲霜佳色鮮昔日南陽浮水後此花祝延幾千年

根城安節

12 占斷陶家秋色奇黃黃白白兩相宜芳盟不變風霜後長擁東籬放數枝

庭紅葉

行信

13 にしきかとまかふ紅葉はさらに又吹もちらさし庭の朝風

僧正

14 いつはあれとわきて日の指夕暮はいとゝ色添庭の紅葉ゝ

宗川

15 山姫も分て心にそめぬらし砌の紅葉色のこるなり

政包

16 薄霧の晴行庭の朝日影移ふ露にそむる紅葉ゝ

貞矩

17 折しもあれそめし梢は庭もせに錦をさらす色かとそ見る

正仲

18 晴曇りまなくしくるゝ朝夕に庭の紅葉そふかく成行

庭紅葉

直政

19 密林掩映半庭中 中有群株葉葉烘西窓 昨夜霜風起滿地 臙脂染錦紅

林學士

20 額額林寒紅萬重 約風沐露待玄冬 孔庭嘗有鯉趨過 葉葉經霜忽化龍

冲西堂

21 雨霑金葉一庭中 染不成乾猩血紅 更有青松爲潤色 半醒半醉與難窮

奚疑

22 玉露凋殘秋葉紅 捲簾坐愛化工濃 想看朱氏榮歸日 畫錦成章庭樹楓

安節

23 楓林織錦擁牆東 落盡衆芳與不空 萬里吳江莫言遠 秋霜染得滿庭紅

寄鶴祝

行信

24 治れる代は久堅の雲井までひゞき合たる 鶴の諸声

僧正

25 ゆたかにもはね打かはす友鶴の声にひかれて千世もへぬへし

宗川

26 かきりなき濱の真砂はるる 鶴のあかぬ齡はあり数にして

長菴

27 千年へん例もしるし此宿の松になれ行友鶴の声

〔政包カ〕
作者名欠

28 千年ともかきらぬ御代にすむ池の汀の靄の声も長閑き

正仲

29 豊なる四方にしられて久かたの雲井の靄の萬代の声

貞矩

30 治れる時をしりてや鳴靄の豊なる代の声きこゆなり

寄鶴祝

直政

31 往昔華亭傳令名又随君復寄閑情縞衣鳴舞長松上三祝風高萬歲聲

林學士

32 求類將雛喜氣存玄裳整頓縞衣翻藍田生玉得佳瑞日下鳴飛欲負暄

冲西堂

33 曾在他郷聊寄思屋頭鶴唳總相宜這般永祝老松上十里風色也太奇

奚疑

34 九臯聲響動歡聽翫露舞風飛下庭靈鶴從來君子化太平有象德惟馨

終

(3) 元祿己巳孟冬初五各會知足院詩歌通題
當座

時雨

信濃守行信

1 心なくすむ山里に音立て時をたかはぬむら時雨哉

僧正隆光

2 一通り時雨し跡をなかむれは柴のあみ戸の露の玉たれ

宗川

3 神な月時をたかへぬ村時雨定めなしとは誰名付けん

以和

4 夕しくれふるかと思れは程もなく日影残りて山風そふく

政包

5 いかはかりけふは山路のしくるらんはるゝともなく雲そうき立

正仲

6 山風に猶さそはれてうき雲の棚引里は村時雨して

貞矩

7 村ゝにたなひく雲のまきれより頓て時雨のめくる山端

時雨

弘文院林學士

8 寒叢點點露華浮一雨有時猶未収詞筆先尋大蘇喜歌林長間小倉遊

遠江守南浩然

9 逐風點水斷還賽凍雨檐前琴韻輕索索蕭蕭驚夢後一簾寒景暮山清

西堂元冲

10 薄暮雲頭粘地時蕭然一雨入簾帷千山萬水忽晴後錦上鋪花色正奇

奚疑

11 霏霏滴滴帶雲來十月群梢潤色催擬見聖教時雨化染成紅錦綠顏回

落葉

行信

12 立ならふ峯の紅葉のちる比は空にしられぬ風も見えけり

隆光

13 はらはぬはおしむ心やふかゝらん庭の落葉の色そ妙なる

宗川

14 おしとおもふ心の色の一しほをそへてちりゆく木ゝの紅葉ゝ

以和

15 朝ほらけ真砂地しろき霜の上に又色そへてちる紅葉哉

政包

16 松風の己か梢はつれなくて庭の紅葉を何さそふらん

正仲

17 立ならふ庭のもみちのちりゆくにみさほそ見ゆる松の一しほ

貞矩

18 ふみ分る山の下道埋れて幾重かさなる落葉なるらん

林學士

19 初怪朔風吹雨輕熟知樹樹著寒聲黃埃委地埋人迹恰似金椒山上行

直政

20 神無月嵐のさそふ紅葉ゝは外面にさらす錦なりけり

元冲

21 萬里景光忽弄晴風翻紅葉異常情斯時却恐使吹落聽始奇哉今夜聲

奚疑

22 獨顧寒庭萬感遷衆梢衰落絶芳妍非風非雨自辭榮輕葉於人何問天

冬祝

行信

23 あかす見ん行末かけて松の雪枝をならさぬ御代のためしは

隆光

24 雪をしもいとはぬ中のましはりに幾度／＼かめくるさかつき

宗川

25 おさまれる御代のめくみの空とてや冬立今も風の音せぬ

以和

26 国やすく民もゆたけき冬こもり千年の春のねさしふくみて

政包

27 亀のすむ池の汀に冬たけてこほらぬ波や萬代の声

正仲

28 植おきし軒端の竹の冬こもり千世もかわらぬ色は見えけり

貞矩

29 萬代の春にさかへんこの宿の冬のけしきは猶しつかなる

冬祝

林學士

30 瑞靄融融冬似春太平有象萬祥臻寒光分惠黃綿襖衣被九州四海民

南浩然

31 親朋修約雅盟芳情伴寒梅稱兕觥十月肅霜風物穩祝延萬壽更無疆

元冲

32 青松高聳築波阜獨立亭亭出世間祝得歲寒長富景冬山如睡賞心閑

奚疑

33 滿目冬天喜氣新寒梅捧玉雪敷錦温衣飽食豐年日鼓腹待春堯舜民

終

(4) 元祿二己巳十月廿七日金地院冲西堂會

竹契還年

隆光

1 すなほなる竹をまなひの窓の内にうらやましくも幾世へぬらん

行信

2 かはらしな陰はみとりに幾年も齢をちぎる藺の呉竹

林學士

3 雨洗風廻枝葉翻千年翠色四時存清陰約壽霜根老湘渭檀欒長子孫

南浩然

4 老根脩竹約長生含露帶風朶清霜後猶餘君子操翠容不改萬年情

元冲

5 寒庭脩竹設賓筵瀟灑襟懷詞錦鮮昔日群賢有命日同工異曲祝延年

村奚疑

6 淇竹移栽愛直心風梳雨洗四時深繁榮修約琅玕色潤屋翠雲千歲陰

竹契遐年

宗川

7 植そめてねさしもふかくちきる哉千代をこめたる藺のくれ竹

可春

8 葉かへせぬ陰にかくれん宿の竹一よ二よに千代をかそへて

政包

9 植おきし窓のあるしのふへき代を千尋の竹や色に見すらん

正仲

10 世とともに栄久しく契そよ藺生の竹のみさはなる色

貞矩

11 みさは成色に千年をあらはしてしけるも久し軒のくれ竹

白水

12 世々かけて色もかはらぬくれ竹の千尋のかけは猶ゆたかなる

雪中残雁 隆光

13 いつちともいさ白妙の雪の中に友よふかりの声かすかなり

樵路日暮 同

14 陰しけき山辺はいつかくれそめて木こりの袖や道いそくらむ

寒草所 行信

15 風さむくまなくや野辺にかよふらし草むらことの霜にかれ行

閑中聞鐘 同

16 けふも又心しつけき夕暮のかねこそ友よきこえきにけり

湖上冬月 林學士

17 一道北風雲霧收晴湖送影玉輪浮寒光徹底洞庭白八百里波凝不流

關路朝雪 同

18 休道霜橋人迹連何論殘月曙光鮮一鞭逐影藍關遠千里風雲馬不前

爐火似春 南浩然

19 更見炭麟爐底紅葛仙遺術一亭中間未識寒威競和氣回春坐暖風

古寺初雪 同

20 精舎冬寒雪漸堆滿林一夜六花開梁園望入僧房去新變舊樓化玉臺

旅中寒風

元冲

21 忽隔天涯萬里程柳邊寄錫繫愁情晚來閑却寒風底驛路殘楓徒錦榮

雪埋苔徑

同

22 瑞雪霏霏冬景加山川塵外玉無瑕朝來一任埋苔徑瓊樹瑤林頃刻花

寒樹交松

村奚疑

23 寒樹後凋堆一峯勁枝長盛秀三冬睡山令却似含笑彩葉代花交綠松

眺望山雪

同

24 千里不遮冬景鮮滿牕山色極晴妍雲間積白土峯雪高引吟望東海天

氷留水聲

宗川

25 澗せはみなかれにそひてこほるらし石まの水の音をすくなき

月照網代

同

26 夜もすから網代の床や照すらんひをまつ波に月はやとりて

山家夜雪

可春

27 しき忍ふ都をよそに山ふかく捨し夜比の霜のさむしろ

田家見鶴

同

28 隔なくけにきこゆなるしつか門田になるゝとも鶴（貼紙「けにきこゆなる文字不足、本紙之通認候」）

水鳥馴舟

政包

29 鰻の子のあしわけ舟に芦鴨のなれてやかよふおなし入江に

霰音破夢

同

30 音たてゝ荻のかれ葉の小夜風に又夢さめすあられふるなり

連日鷹狩

正仲

31 はし鷹の鳥立の草の跡とめて此ころ分野邊の朝霜

漁舟連波

同

32 夜をこめて釣の小舟やうかふらん波にたゆたふいさり火の影

野亭人稀

貞矩

33 行かへる人しなれば草の戸に道こそ見ゆれ野辺の遠近

濱邊寒廬

同

34 白波の音さへ寒きむら芦のかれ葉の末にかよふ濱風

終

(5) 元祿二己巳十二月十三日遠江守會

寒月

行信

1 風絶て晴行空の更る夜は霜の色そふ冬の月影

海邊雪

以和

2 風さそふ波より上の花と見ん雪そ散かふ松かうら嶋

行路雪

道定

3 行末をおもふも寒し旅の空とまりさためぬ雪の山路は

寄鳥戀

宗川

4 別れ路は人の心に有ものを何しか鳥の音にかこつらん

寄書戀

政包

5 見るに猶絶ぬむかしそおもはるゝ契り置てし水くきの跡

浦松

正仲

6 色かへぬみとりに馴てゐる鸛の老せぬ声もわかの浦松

里竹

貞矩

7 植しより根さしもさそな深からん里のめぐりに茂るくれ竹

庭上雪

南浩然

8 沙漠雲寒慘玉塵斜斜整整又續續滿庭風色一般別頃刻花開樹樹春

雪中春

冲西堂

9 雪苦霜辛曾不妨寒梅含笑忽呈祥千林縦横玉花色輪却窻前一朶香

年内梅

村奚疑

10 麗色住香只有梅寒庭拂雪日徘徊幸邀年内立春候冷葉疎花昨夜聞

寄世祝

行信

11 治れるしるしも見えて道ひろく関の戸さゝぬ御世のゆたけさ

宗川

12 國やすく治る御代のためしとてゆたかに年の行めぐりぬる

以和

13 諸人も猶祈るなりとことはみちのみちたる御代とあふきて

道定

14 つきせしな恵も深き君か代のかはらぬ色を松やしるらん

政包

15 時し有て聖の出しいにしへをさらにそおもふ御代のゆたけさ

正仲

16 ゆく末のかきりもしらす久堅の日影にたくふ御代のゆたけさ

貞矩

17 關の戸も名のみ斗に行かよふ道ある御代はかきり知られて

南浩然

18 十雨五風静四夷太平氣象感清時歌詞高會興最好擊壤先吟雅頌詩

冲西堂

19 徳色道光満大千野人懷恵武陵邊即今準擬唐天下萬國中和幾祝延

奚疑

20 道學薦人薄俗醇禮義行世古風新祝看忠質文華徳四海旋流三代辰

終

(6)元祿三庚午年六月二日櫻田館會

雨後夏月

隆光知足院

1はる／＼と晴行空の村雨に涼しさそふる夏の夜の月

綱元毛利甲斐守

2雨はるゝ名残の露の玉さゝにひかり待とる月のすゝしさ

林學士

3南凱吹晴新月孤四檐餘滴有如無梅霖収霽洗紅暑雲掛招涼一顆珠

重信

4むら雨の過る軒端の露に又ひかりをそふる夏の夜の月

聽雪

5乃是仙家避暑臺雨晴庭際月奇哉祇將炫炫草頭露移得廣寒宮戸來

行信

6夏の夜の風よりつくく涼しさに雨も晴行空の月影

直政

7漠漠暑雲初霽時雨餘新月最清奇萬林分影滿枝露一片光成千片姿

宗川

8一通り村雨過る山端に涼しくむかふ夏の夜の月

奚疑

9 一雨晴來洗暑埃薰風幸喜入南臺月輪輾出夕林外露葉含光萬玉堆

長堅山田太右衛門

10 雨雲の立居るほともかきり有て晴行月の空に涼しき

以和

11 端居してむかふも涼し夕立の雲をはなれて出る月かけ

正仲

12 涼しさの露を残して雨過る砌に清き夏の月かけ

可春

13 あつき日も涼しき月と成りにけり雨一通り過る雲井は

貞矩

14 立まよふ雨雲はるゝ禁より涼しく見ゆる山の端の月

連峯霞
林學士

15 多少屏顔改舊容氤氲一氣影衡縱朝雲讓色彩霞麗粧點巫山十二峯

餘寒月
貞矩

16 寒帰る空に嵐の音添て霞とはなき春の夜の月

浦歸雁
以和

17 わかれ行思ひの煙り立そふやしほやく浦のあまつかりかね

山家花
正仲

18 尋くる人目まれなる山里は軒端の花を友とこそ見れ

松間花 直政

19 松林花影領春風一段烟霞添色濃造化要看自然巧織成錦繡布青紅

落花雨 聽雪

20 十分春色漸將歸處處園林花易飛白雨吹來紅雨亂詩人誤欲濕吟衣

江上藤 隆光

21 漕出る入江の舟はむら雨の雲をしのくかきしの藤波

暮春鶯 宗川

22 ことの葉に声の色香もおしと思ふ春の名残の蘭の鶯

夜時鳥 行信

23 名残こそ猶おしまるれ時鳥小夜更かたの雲の一声

夕納涼 林學士

24 偶乘夕暗尋水涯葛衣含雪照涼懷池蓮香度晚風好剩見南山雲氣排

初秋衣 安節

25 苦熱時移爽氣清滿襟涼意在南榮礪聲休爲秋風促殘暑猶堪細葛輕

故鄉露 長堅

26 ふる里のその名にしおふしかの山夕こえくれは袖の露けき

岡部薄 重信

27 暮て行秋の名残やしたふらんならひの岡にまねく薄は

峯初雁 行信

28 明わたるみねの霧間の絶／＼につばさ見えくる初鴈の声

水邊月 直政

29 月射清波枕水郷欄干送影帶微涼人間亦有廣寒改洗出桂枝一點光

舟中月 正仲

30 小ふねこく心もすみてはる／＼と月にみなぎる秋のうら波

遠碁衣 貞矩

31 絶／＼に聞え来にけりよもすからいつくの里に衣打らん

曉落葉 聽雪

32 明月滿窓霜滿簾葉零若雨滴閑檐夜深暫有櫓聲歇倏忽風來晴又添

濱千鳥 綱元

33 敷島の道は有りととも浦濱にむれ来てあかぬ友千鳥哉

古寺雪 奚疑

34 高林雲邃一堂生路細人稀膝六盈万木千岩平白雪埋殘古寺暮鐘聲

樵路雪 長堅

35 歸るさの山路もわかすかきたれておもきかうへの雪の柴人

名所松 重信

36 千年とは猶かきらしな万代もかはらぬ色やわかのうら松

山家鳥

可春

37 山里は友と頼んあらましも都にかわる鳥の声哉

山家夕

奚疑

38 元は無媒徑路山獨娛風月出人間柴門不厭暮天寂宿鳥棲猿共伴閑

田家烟

綱元

39 なをき世は門田く^くに立烟り末も賑ふ昔しられて

羈中渡

以和

40 草枕いつちさためて結はまし夕こえきぬる佐野く渡りに

庭上竹

安節

41 渭子湘孫各遠篁滿庭脩竹勝尋常萬竿直立綠如束要見清陰來鳳凰

夜述懷

可春

42 文も見すくらきをまゝの心にて何のためなる窓の灯

社頭祝

隆光

43 陰たのむ心もふかき杉村に行交たえぬ三輪の神垣

終

(7) 元祿五壬申年十二月廿二日江戸櫻田會

重信公

行信公 南英

實信公

志水宗川

岡本道壽

村田長菴 以和

三浦可春

植山檢校 梅枝

日戸仁兵衛貞矩

中野新左衛門正仲

兼題

松雪

重信

1 をしなへてけさは老木の雪の松こや十かへりの花と見るへき

竹雪

2 豊なる年をしらせて呉竹の末葉の雪のをきかさぬらん

歳暮

3 人なみの年の暮さへ老ぬれは我か身ひとつにおしまるゝ哉

松雪

行信

4 山風のかよふ軒端も冬くれはひゝきをうつむ松のしら雪

竹雪

5 寒くれし夜の間の雪におれふして日影をへたつ窓の呉竹

歳暮

6 いつとなく送る月日もけふとおもへは^(マコ)おしむ年の暮哉

松雪

宗川

7 十かへりの花もやかねてにはふらん木高き松に雪はつもりて

8 年寒き雪の中にも陰そへて猶あらはるゝ庭の松枝

竹雪

9 見るほとそつもりもあへぬ呉竹のなひく小枝に雪はこほれて

10 夜を寒みをき出て見れは窓ちかく竹の葉しけりふれるしら雪

歳暮

11 諸人も猶あふくらしこの殿の千世の初の年のくれとて

12 末遠き千年もさそな暮毎のけふの祝やためしなるらむ

松雪

道壽

13 雪も猶千年ふるへき松か枝にちきり有てやつもりそふらん

竹雪

14 積りては風も音せぬ竹の葉にかきたれてふる雪のしつけき

歳暮

15 この宿にくれ行年もゆたかなる御代の恵をそへてつむらん

松雪

可春

16 此まゝにけたても見はや常盤なる松の梢を（以下欠）

竹雪

17 見せはやな人しもとはゝ一ふしはありふる雪の庭のくれ竹

歳暮

18 春秋になれこし空の名残とておもへはおしき年の暮かな

松雪

梅枝

19 音たてし嵐も下に埋れて雪しつかなる庭の松か枝

竹雪

20 風ふけはみとりを見せてくれ竹の又ふりうつむそのゝしら雪

歳暮

21 もの毎にまきれぬものはおもひ出のある身も年の暮はおしまる

松雪

正仲

22 曙の花かとそ見る高砂の松の梢にふれるしら雪

竹雪

23 風寒し夜の間に晴るけさの雪かさねてなひく蘭の呉竹

歳暮

24 春秋を送る月日の数はあれと分てもおしき年のくれかな

松雪

貞矩

25 ふり埋む雪の下より色見えてこと木にかはる松のむら立

竹雪

26 はれ間なく外面も見えすふる雪に猶かけくらき窓のくれ竹

歳暮

27 くて行ならひなからも関しあらはしとゝめん年のかよひち

松雪

長菴

28 つもれ猶豊なる代にふる雪は老木の松の花と見るまで

竹雪

29 聞馴し葉分の風も音絶へて雪にうつもる窓のくれ竹

歳暮

30 身につもる老とならすは年毎にくるゝ名残もおしまさらまし

通題

寄國祝

重信

31 もろこしのためはしらす神代よりうこかぬ国の道そかしこき

待戀

32 まつといふ心からにやなかき夜もはや更ぬるかあかつきのかね

祈戀

行信

33 あふ瀬ともならさらめやは貴船川いのる心の水の行すゑ

寄國祝

34 四の海波もしつかにあしはらの国民すらも御代になひきて

逢戀

實信

35 いつまでも契り絶せし中川の行すゑかけてあふせとおもへは

寄國祝

36 民さかへめくみの末も國ひろく千世万代の君のことふき

近戀

長菴

37 人めせく心はかりのものこしにもいひかはす事そわりなき

寄國祝

38 すなはなる心ひとつにおさまりて代々にうけつゝ国そ久しき

見戀

道壽

39 日にそへて終に袂もくちはてん見そめてしよりかゝるなみたは

寄國祝

40 あふくそよ猶民草の末迄も君か御國のひろきめくみに

聞戀

梅枝

41 とひよりはきゝもとかめんいひ出る思ふあたりの人のことの葉

寄國祝

42 雨雪も君か恵にふりそへて猶さかへ行国の民草

忍戀

貞矩

43 行末は袖の色にや出なましつゝむとすれとあまるなみに

寄國祝

44 治れる世のためしとてをのつから猶榮へ行国の久しき

久戀

正仲

45 かそへてもいゝつくされぬつらさ哉つもるうらみの中の年月

寄國祝

46 恵あれや治りなひく秋津洲の国ゆたかなる御代の民草

遠戀

可春

47 行かよふ道は千里も何ならず人の心のおくそしられぬ

寄國祝

48 治れる国のかひある声なれや千とせをよほふ(ママ)羈(マテ)の郡は

契戀

宗川

49 うき事は身に積るともたへてましものちきりのすゑもとをらは

寄國祝

50 おさめしる心の道のおくなれや代々にたゞしき国のおきては

終